

ひかりねぎブランド産地の維持発展

～安定生産による規模拡大を目指す～

1 課題の目的

J Aちばみどり営農センターそうさ管内の「ひかりねぎ」は全国的なブランドとして市場の評価が高く、生産者数は約 230 戸、ねぎ栽培面積は約 120ha である。

ブランドとして高単価で販売するためには、先物取引が中心となっている現在の市場において、ロットの安定確保が最も重要である。しかし、近年の台風をはじめとする厳しい気象条件下で、収量品質を安定させることが難しくなっている。

産地維持のため、どのような気象条件でも安定生産できる技術を研究し、個々の規模拡大につなげることを目的とする。

2 課題の背景

- (1) 産地の維持・発展に向けたアンケート調査による現状把握が、5年以上実施されておらず、データの更新と産地ビジョンが求められていた。
- (2) 近年、関東地方に大型台風が接近・上陸するケースが増えており、ねぎ栽培においても強風による倒伏での曲がりが発生し、品質低下を招いている。
- (3) ねぎは最も湿害に弱い作物の一つである。近年の気候変動の中で、長梅雨やゲリラ豪雨などによる影響を受け、欠株や生育不良が多発している。

3 普及活動の経過

- (1) 全戸アンケート調査の実施
ねぎ生産者全戸を対象に、現状の経営規模と労働力、後継者の見込み、および5年後と10年後の営農の見通しについて、そうさ園芸部、J Aちばみどりと連携し調査を実施した。
- (2) 強風対策の実施
昨年度、管内で効果が見られたソルゴーによる防風柵の展示ほを設置し、7月に講習会を実施した。また、本年市販が始まった培土機「ねぎ美人」を試験導入した。加えて、曲なりに非常に強い品種である「羽生一本太」の栽培推奨を行った。
- (3) 排水対策の実施
全層破碎を行うニプロ「パラソイラー」の試験導入を行った。また、明渠の設置方法など、管内で効果が出ている排水対策の手法について調査した。

4 普及(調査)活動で得られた成果

- (1) アンケート回収戸数は197戸、回収率は90.4%であった。平均年齢は63歳、1戸当たりの作業員数は2.5人、平均栽培面積は61aであった。83%が家族労力のみであ

り、後継者がいる・見込みがあると回答したのは19%であった。今後の見通しについて、規模拡大意向は5年後で17%、10年後で15%であり、一方で離農意向は5年後で15%、10年後で37%であった。栽培面積は5年後には最大30ha前後、10年後には最大50ha前後の減少が予想された。この結果から、産地規模維持のためには5年後までに20人、10年後までには40人の新たな人員確保と、担い手の規模拡大は5年後までに40a以上、10年後までには1ha以上が必要と推定できた。

- (2) ソルゴーによる防風対策は台風15号時にも一定の倒伏軽減効果を示し、畝に対し直角に倒れた場合は通過後に手直しを要しなかった。講習会後の新規導入戸数は約10戸であった。培土機「ねぎ美人」は畝の破壊が大きく、その後の土寄せ作業が困難になるため、改良が必要との評価を得た。品種「羽生一本太」については栽培者が増え、今年も台風による曲がりほとんどなく、秀品率は群を抜いていた。しかし、長梅雨による湿害と夏期の軟腐病の発生が他品種より多く、対策が求められた。
- (3) パラソイラーによる排水改善効果は大きく、試験ほ場は例年排水が不良で苦慮していたが、導入後は2度の台風と10月25日の豪雨後も、ほ場に滞水は見られず、周辺他ほ場と比較しても湿害の影響は大きく軽減され、排水効果は3か月続いた。
- (4) 管内の排水対策調査では、山土を搬入してほ場に傾斜をつけ、排水路に排水しているほ場では、今年度の長梅雨においても湿害の影響をほとんど受けておらず、隣接した客土未実施のほ場と比較すると、生育に約2か月の差がついた。



ソルゴーによる防風柵



ニプロ「パラソイラー」

5 問題点と今後の展開方向

産地維持のための人員確保手段の検討が必要である。また、高度な栽培技術の継承のため、他産地に事例のある里親制度や篤農家での研修制度なども検討していく。

担い手の規模拡大をすすめるため、これまでのひかりねぎ出荷に加え、機械化を図ることができ、選別作業に時間のかからない加工業務用と組み合わせた経営スタイルを研究していく。近年の気象条件下において、安定生産のためには気象災害対策が必須である。ソルゴーによる防風柵、パラソイラー、レーザーレベラー等による排水対策などを組合せた「災害対策モデルほ場」の設置を検討する。その上で、レーザーレベラー等の導入については、地域の水稻農家とも連携し、受委託システムの構築についても検討したい。

(匠瑛グループ 普及指導員 岡崎 遼人)